

今で識字学級五年生

尾田幸秀

まず、私の担当の先生を、紹介します、三島小学校の林田先生と言います。先生は、私に、どんな勉強をしたいですかと聞いて下さいました。私は、勉強がきらいで、あまり勉強していませんでした。小学校一年生から教えて下さいと言いました。先生は、何故一年生の勉強からしたいのですかと聞きました。

私は、今まで勉強を全然してなかった事を後悔しているからですと伝えました。漢字と足し算と引き算を教えてもらいました。二足す一は三や五引く三は二の計算をノートに書いてもらって練習しました。次は、先生が、千円の手袋が、二割引で売っていました。何円にな

りますかなどの文章問題を出してくれて、私は少しずつ解いていきました。漢字は、「山」「川」などの小学校一年生の勉強から始めました。一年生と二年生の内容は、スムーズに勉強できました。三年生の内容は、とても難しくなり私は、努力しても勉強を覚える事ができないと思いました、それを先生に言うと、先生は少し考えてから、日記を書いて私に見せて下さい。日記を書く事で、私は尾田さんの事が少しずつ見えてくると言いますと言いました。私は、日記を書いた事がないので何を書くのか分かりませんでした。「一日の事を良く考えて振り返ってみましょう」と、言われたのです。家に帰ってから良く考えました。先生は、私が書いた文章に赤ペンで印をつけてくれたり、返事を書いてくれたりしました。先生は、万博公園に行った事を日記に書くと、先生は、万博公園に行くのですか？気をつけて行

つてらっしゃいと返事しました。また、ローマ字の勉強も教えてもらいました。今、私が、先生方に教えてもらった事を書きます。「あはA」「い」「は」「う」「は」「U」「え」「は」「E」「お」「は」「O」と教えてもらいました。パソコンで、何回か押してみました。でも、私は、サ行までしか覚えていませんでしたので、夕行からは分かりませんでした。

私の体は、不自由で、「識字学級から自分の家に帰るのに、約一時間ほどかかります。」先生に言いました。すると、先生は、私の車に乗せてあげると言ってくれました。それから、私は、おおよそ一年ほど先生の車で送ってもらいました。識字の皆様と三島中学校の「夢・ふれあいフェスタ」というお祭りに参加しました。果物屋のお店を開きました。リンゴやミカンや柿など、おいしいそうな果物を沢山売りました。特に、リンゴは、普通のお店では買えない

ほど安い値段でした。果物は全部あつという間に完売しました。当日まで三回ぐらい打ち合わせをしました。そして、当日の予想もしなかったチームワークの良さが、とても嬉しかったです。毎週一時間半という短い時間しか一緒に過ごしていなかった仲間や林田先生と力を合わせて、一つの目標を達成できました。それ以来、毎年三島中学校のお祭りでは、識字学級の仲間と果物屋さんを出しています。林田先生に助けてもらいながら、識字学級に入る前の自分の生活もふりかえる事ができました。そして、作文を書く事にしました。私は毎週木曜日の識字学級が楽しみです。一番の理由は、色々な事を教えてもらえるからです。今でも私は、先生の事が、すごく、気になっていますが、今は、三島小学校から他の学校へ転勤されました。私は、また、先生に会える日を楽しみにしています。今までに、合計五名

の先生がかわって、少しは、落ち着きがなく、勉強に集中できなくなる時もありました。その時は、識字学級を辞めようと思う時もありました。他の先生方も、生徒さん方も、「やめないうで、頑張つて続けなさい。」と言つてくれました。

識字学級に入学出きた事が、私にとつて一番の宝物だと思います。人間は、一人では、なにもしないといつづいづい思います。

最後に、私を識字にさそつて下さいました総持寺のち・愛・ゆめセンターの南さんにあつて、お礼を申し上げます。又、識字学級の先生方と生徒さん方には、感謝の気持ちを一日も忘れず、これからも、私は、識字学級に通つていく事を、心につよく、言いきかせます。

本当に、識字学級の皆様方、ありがとうございます。

「母ちゃん、学校行つちよるよ」

殿馬場中学夜間学級 折田 貢

一九四五年八月十五日、母が私と兄の頭に手を置いて「明日から防空壕に入らんで

もよかよ。」と言つた事を、今も思い出します。九州の宮崎市、父親の実家で、私は終戦の日を迎えました。八歳でした。父親の実家は、借家や畑もあり、戦時中も、母や兄と野菜やさつま芋を作つて、子供にとっては、楽しい毎日でした。

しかし、終戦から数日たったある日、母が突然、病に倒れました。父はリヤカーに母を乗せ、病院を捜しましたが、小さな診療所のベッドで、終戦の日からわずか十五日で、帰らぬ人となりました。私と兄は、声をあげて泣いたのを覚えています。

この日を境に、私の人生は大きく変わりました。母さえ、いってくれば、私も学校に通っていたのにといい思いが、強く残っています。母の死後、父は、お酒に逃げ、後に迎えた継母は、家財道具を全部持ち出して、別の男の人と失踪しました。結局、私は、学校にも行かないまま、十三歳で、知り合いの農家に預けられました。毎朝四時に起きて、馬草を刈りに行く仕事は、十三歳の私には、とても辛いものでした。その頃の楽しみは、先輩の作男から習った乗馬だけでした。友人に競馬の騎手にならないかと、誘われた事もありました。体も小さいので私自身もなりたいたと思ったのですが、読み書きができないので、テストを受けることができず、騎手になる夢はあきらめました。十九歳になった頃、人並に恋もしました。養子縁組の話などもありましたが、先方の親戚から反対され、破談になりました。このまま

みやぎやき さくおむし わたし なや すえあきまり お みやぎき はな けっしん
宮崎で作男を続けていくのか。私は悩んだ末秋祭が終わったら宮崎を離れる決心をしました。一目会いたいと思っていた父は、消息不明、兄は京都で働いていると言う噂。私は、母の墓前に別れを告げ、夜行列車に乗りました。大阪に着いたのは、翌朝七時頃。二十一歳の秋でした。大阪に着いたものの地名を読むこともできず、とりあえず、バスの終点まで乗って、そこで運送の仕事を捜そうと思いました。しかし、履歴書も運転免許証も持ってないので面接を受けても断られてばかりです。文字を書けない悔しさと情けない思いでいっぱいでした。優しかった母を思い出して母さんが生きていたらと思うと涙がながれました。明日、田舎に帰ろうと思えました。大阪最後の日、運よく長距離専門の会社に運転助手として採用されました。同じ九州出身の先輩が文字はもちろん、交通法規など教えてくれたおかげで、

二年後には、大型自動車二種免許を取得することができました。やっと自分の夢が実現して感謝の思いでいっぱいでした。六十歳で退職するまで、トラック野郎で全国を回り、がむしやらに働きました。その後、堺のタクシー会社でアルバイトもしました。六十九歳の時、体調をくずし、診察を受けた結果、胃がんが見つかりました。胃の三分の二を切除しました。そして仕事もやめて、自分の好きな事をして暮らそうと思えました。ちょうどその頃、近所の人から、殿馬場中学夜間学級への入学を誘われました。私は、七十歳を越えて今さら……と、一度は断りましたが、家族から「お父ちゃんは子供の頃、学校に行つてないやろ。学校は楽しい事がたくさんあるよ。」と、背中を押されて、入学しました。今年で、はや二年目になります。子供や孫のような、いろんな国の友達が、たくさんできました。入学した

頃は、文字は大体読めました。が難しい漢字を書くことは、できませんでした。算数は割り算かけ算さえできなかったのが、今はできるようになりました。

「母ちゃん、毎日ちゃんと学校に行つちよるよ。」天国の母も、きつと喜んでくれていると思います。これからも、心身ともに健康でいる限り、勉強を続けていきたいと思っております。

かけがえのない自分

ひがしいくの やかんちゅうがっこう
東生野夜間中学校 李明子

月日がたつのは、早いものです。

私は、夜間中学校には、友達にさそわれて来ました。この年になって学校に行くのは、はずかしいなと思いつながら、初めて学校の門を入った時は、胸がドキドキしていました。

今は、この東生野夜間中学校に入学して九年になり、もうすぐ卒業です。毎日、楽しい学校生活を送っています。この学校に入学して、本当によかったと思います。

思えば、学校に来る前の私は、暗い人間でした。学校で文字の読み書きを学び、友だちもでき、今は人前でしゃべれるようになりました。それまでは、人が言っていることを「そう

なんや」と、聞いているだけでした。でも、今は、自分の頭で考えて、意見を言うこともできます。なんだか、人として、広く大きくなったような気がします。

授業では、自分の国の歴史を学ぶことができました。植民地時代、なぜ、父が私たち家族と離れて日本に行ったのか、その理由がわかりました。歴史上のいろいろなできごとを習って、自分の国に誇りをもつこともできました。

また、朝文研では、チャングムも教えてもらっています。すぐくおもしろいです。

子どもの頃、私は、学校へ行くことができず、読み書きも思うようにできなくて、ずいぶん悔しい思いをしてきました。けれど、子どもの時に夢にまで見た運動会や遠足など、本当に楽しい経験もできました。

念願の夜間中学校に入ったから、先生方や多くの仲間との出会いがあったからこそ、今の自分がいます。卒業するまで半年たらず、授業も行事も朝文研もぜんぶ参加して、最後まで学校生活を楽しみたいと思っています。

これまで、そしてこれから

東田信子

一、部落出身を知る

先日、大阪のホテルで日本水産伊丹工場創業50周年記念OB会があった。その会社に私は十代の後半三年間ほど勤めていた。ここ数年は毎年のように開かれていたOB会も世話役さんをはじめ参加者も高令になり、もう最後にするという案内を受けとり私は迷っていた。なつかしい顔に会えるかなあ、またまたあのいやな記憶をよびさますだけかなあ……と。もう最後のOB会ということで出かけて行った。

当時お世話になった工場長さんは88才とのこと、両脇から支えられるように登場しあいさ

つされていた。私のいやな記憶とは 私はここであの時 自分が部落出身であることを知らされた苦い思い出があったのだ。何も知らなかった私にそのことを薄々と感じさせて、噂を広げていったあの女性も参加していた。

親しげに私に声をかけてきた。忘れたことのない人、Aさんだ。伊丹の女子寮にはその当時「金の卵」ともてはやされた中学卒業生が全国から集団就職で集まってきていた。七人一部屋の寮生活は難しかった。仕事はすぐに覚たが、毎日の寮生活は慣れることがなかなかできない。女子寮は同年令ぐらいの女ばかりの集まりで お互い気をつかいながらの人づきあいである。楽しいこともいろいろあったはずやけど。私は。中学校卒業後二年ほど京都の西陣で織物の仕上げ工場に住み込みで勤めていた。だから寮ではまわりより2、3才年令が

上になる。そのせいか室長や班長をまかされることになる。すると陰口やうわさ話もはいつてくる。各自が自分で買いこんでいるお菓子や日用品がなくなることもあった。

そんな時犯人さがしをしたりうたがわれる人が出たりする。「あの子は、四国の部落出身らしいで……」という言葉もでた。いかにも秘密をあばくという言い方で内証やでと広がっていた。私は部落という言葉を聞いても意味がわからなかった。でもなんかかくしごとでよくない地域のことらしいぐらいは伝わってきた。ある年、篠山の私の実家のある場所を知っている人が入社してきた。「あんた篠山のどこ？」といった会話のあとに「●●の方は部落やで」という話が続く。私に直接言うのではなく、そういった言い方でそのことを知らせてくれたのがAさんだ。一瞬にして私のことやな…と身がふるえた。いつか耳にしたことのある「新平民」

という言葉が頭にうかび結びついた。そういえば月まいりに家に来てくれる近在の坊さんとは母や父がそんな話をしていた気がする。私はもうこの職場も仕事も寮生活も続けることはできない。何も理由を告げず退職を願いだした。私の突然の申し出に事務所の人も上司も「何か嫌なおもいをするものがあつたのか？」と心配してくれた。でも何も言えなかつた。自分の中でもうまく整理できていない。田舎へ帰つてまず両親に確かめてみないと…。親はそのことを知っていたのだろうか。一言もそんな話はしたことがない。単なる噂で親も知らないことなのだろうか。どっちだろう。なぜこんなこと今まで考えたこともないんだろう。なぜなぜと頭の中はそんな疑問がまわっていた。誰に相談することもなく退職して田舎に帰つた。

ある日、母と二人で畑仕事をしていた。田のあぜの草ひきのような仕事をしていた。「聞くなら今だ」と思った。今もその時のことその場面が頭に浮かぶ。手を動かしながら、顔をあげずに

「お母ちゃん、うち部落の子やつたん？」

「そうや」

母は顔もあげない

「お母ちゃん、知つてたん？ そんなこと、これまで一言も言うたことないやん。知つてたのになんで私に教えてくれへんかつたん？」

「どんな言葉でどう話せばええか、お母ちゃんにはわからなかったんや、上の姉ちゃんらにも別に教えてないけどいつの間にか気づいていったみたいや。外へ出たらそんなことも気がついて苦勞する日がくると思ったから 誰にもうしろ指さされんようにちゃんとやれよ、しつかり生きていけよ、と言いなながら育ててきたはずや。」

「苦勞していやなおもいをする日がくるってわかってたら教えといてくれたらええやん、」

「外に出て苦勞するなら親のそばにいる間々くらい知らんぞええことは知らんままでええと思たんや。」

別の機会に父にも同じような気持ちをおづつけてみた。父は

「ちゃんと仕事をして人に認められる生き方をしてさえいればなんにも隠すことはないし人

にあれこれ言われることもない。この地に住んでたら、あの人はあの家は部落や、あのムラは部落や、とみんな知ってる。でも都会に出てみんなの中にまじってしまえば自分から部落民やと言うて出んかぎりそんなことはわからんままや、日本の中では部落民でもみんなと同じ電車にも乗れて同じように仕事もできる。黒人は外見からして隠すこともできん。同じ車やバスにも乗られへんし、同じ店にはいつて一緒に物を食べることもできんらしい。露骨に差別されるんや。わしらの子どもの時分は部落に対するいやがらせはもつともつとぎつかった。それに比べたら少しずつでもようになってきている。昔よりはましや。差別されても生きていけるように学校にも頑張って行かせたんや。頑張って働ける丈夫な子になれと育ててきた。親としてできるだけのことはしてきたつもりや。姉ちゃんも兄ちゃんもどの子も同じようにぞ

んな思いで育ててきたんや。後はおまえの頑張りで打ちかって生きていくんや。」

父や母とこんなやりとりをしても納得できるものではない。同じような気持ちで堂々めぐりでおそつて来る。すぐ立ち直れるものでもない。くどくどこんな話を繰り返した。見かねたのだろう。13才上の姉は「私らは学校行きながらそんなことはうすうす感じて知っていた。そんなことも気づかずに知らんままやっつたと言うのはあんたがアホやからや。親を責めてばかりいやんと自分でも勉強してみ！」と解放運動の理論、全国女性部大会などでもらつて来る冊子やその他部落問題に関する本を貸してくれた。

部落出身であることを知ったあの日から50年近くがすぎた。いつもそんなことばかり考えて生活しているわけではないが、あの日から「部落」ということばが私の意識から離れたこ

とは一日としてなかった。今まで何気なくすごしてきた幼い日の思い出の「コマ」コマが、あれも私が部落やったからかなあと見えてくることがあった。小学校高学年の頃、何人か仲よしで集まって遊んだ。夕方帰宅が遅くなるなど言われていた私は、楽しかったけど一人ぬけて帰った。あとになって他のみんなはその日は友だちの家に泊つたことを知った。泊まることは知らされてなかったし、「泊まったら…」の声も私にはかからなかった。いつも遊ぶ仲よしなのに私だけはすされたみたいでわけもなく淋しい気がした。また私のウチにみんなが遊びに来ることもあった。

そんな時お母ちゃんはお茶やお菓子を出してくれた。「飲んでくれるかなあ」と言いながらいつもとちがうきれいな紙に包んでおせんべいやはじき豆を出してくれた。あの気づかいは何

だったんだろう。また家庭訪問の時期先生にわかるように地図の自分の家に赤ペンで印をつけていった。ある男の子が「東田さんは●●の子やで」と言うと先生はもうそれだけでわかったように私には尋ねなかった。又、こんなこともあった。私が地区外の子の家に遊びに行くと言うと姉は、「いろいろまわりをよう見て勉強しておいでや」と言った。私がたまに自分の身辺整理や片づけ仕事をしていると、「信子もイロイロ外を見て学んできたなあ、やっぱり村の外はちがうやろ。」という意味のことを言った。あれはなんだったんだろう。思い出す断片の中に、まわりとはちがう何かを感じとらせるものはあったのかも知れない。私は何も気づかなかつたけど部落やからそんなこと言われたのかなあ。姉はよく、「信子はアホや」と言ったのはこんなことやったのかなあと。この年になってはつと気がつくように思いおこすことが

出づきいんごのいんごです。

人生負けたらあかん

あさか しきじ にほんご きょうしつ むらかみ しげさだ
浅香識字・日本語教室 村上重定

平成15年10月1日でした。阪和住吉総合病院に入院しました。入院の原因は血液にばい菌が入ったからです。お医者さんは「今死んでもおかしくないくらい危ないです。家族のみんなに連絡して下さい。」といました。しかし私にだれにも連絡しませんでした。長男は初めから一緒にいてくれました。

入院してから4ヶ月は意識不明でまるで植物人間のようなようでした。又1年間はベッドで寝たきりでした。少なくともトイレくらいは一人でできたかったです。人生負けたらあかんと思いつながら前向きにリハビリに頑張りました。

1年7ヶ月過ぎて退院の目処がたちました。退院してからは毎日長居のスポーツセンターにいつて色々トレーニングをしました。しかしなかなか思いどおりにいきませんでした。でも考えて見たら何回もベットから落ちた日もあったし、それで看護婦に叱られた日も多かったです。

しかしながら今は皆様のはげましがあってこんなに前向きで頑張っています。少しずつ人の為又は自分の為の人生を楽しんでいます。

名前 なまえ

李粉任 リブンニム

私は わたし 長栄夜間中学校の ちようえいやかんちゆうがっこう 李粉任 リブンニム です。

日本で にほん 生まれ う 育ち そだ ました。

しかし、今まで いま 学校 がっこう に 行 い ったことが ありません でした。

今年 ことし やつと にゆうがく 入学 にゅうがく することが できました。5年前 ねんまえ に にゅうがく 入学 にゅうがく した か った です。

毎日 まいにち、学校 がっこう に 来 き て 勉強 べんきやう することが たの 楽しい です。

長栄 ちようえい 中学校 ちゆうがくがっこう では リブンニム 李粉任 ほんみやう の よ 本名 ほんみやう で 呼 よ ばれて います。

私 わたし を ふる 古く し から 知 し っている ひと 人は ほんみやう 本名 ほんみやう で よ んで くれます。日本 にほん の なまえ 名前 なまえ も あ り ます。

が、名前 なまえ を にほん 日本 にほん の なまえ 名前 なまえ で 呼 よ ばれた こと は あ り ませ ン。

私 わたし は おや 親 おや が つ けて くれた 名前 なまえ が だいす 大好き です。

これから なまえ この なまえ 名前 なまえ を たいせつ 大切 たいせつ に して、夜間 やかんちゆうがっこう 中学校 ちゆうがくがっこう で べんきやう いろん な な こと を べんきやう 勉強 べんきやう したい と思 っ て おも います。

ひろしまひばく
広島被爆

イ ジョシ オク
李 鐘 玉

昭和二十年八月六日午前八時十五分広島に原爆が投下されました。その当時私は
しょうわにじゆねんはちがつつむいかごぜんはちじじゆこふんひろしま げんばく
学校から勤勞奉任の最中でした。
がっこう きんろうほうし さいちゆう

原爆を載せた飛行機は、上空飛行中でその飛行機をみるために外へ出ようとした瞬間
げんばくの ひこうき じやうくうひこうちゆう ひこうき そと で しゆんかん
ピカッと光が放たれました。何が起ったかわけもわからず目の前が真暗になりました。
ピカッと ひかり はな なに おお め まえ まつぐら

「助けて」「助けて」と弱々しいうめき声が聞こえて来ました
たす たす よわよわ こえ き こえて 来ました

私自身もその場で行ったり来たり動きながら助けを求めていました。
わたしじしん ぼ いかうき うごきながら たす もとを 求めていました。

建物は破壊され、人々は倒れ数人のみが生きていた様子でした。そこから抜け出なければと
たてもの はかい ひとびと たお すうにん い よう ぬか 出なければと

必死の思いで道を探しました。丁度大きな柱が倒壊した側に光が差してその方を見ると
ひつし おも みち さが ちやうど おお けしら とうかい がわ ひかり さし ほう み
穴がありそこから這い上がり外へ出ました。
あな ありそこら 這い上がり 外へ 出ました。

「岩本さん」という声が聞こえてそこに友人がおり、確認のしようが無い程顔に火傷を負
いわもと という 声 が 聞こえて そこに 友人 が おり、 確認 の しよう が 無い 程 顔 に 火傷 を 負
つていました。二人が手をたずさえて、安全な場所を求めて市中をさまよっていると途中、
つて いました。 ふたり が 手 を たず さえて、 安全 な 場所 を 求めて 市中 を さまよっている と 途中、
急に空が真暗になり槍が突きささる様な真黒い大雨が降って来ました。それは今迄に無い
急に 空 が 真暗 になり 槍 が 突き ささる よう な 真黒い 大雨 が 降って 来ました。 それは 今迄 に 無い
激しい怖い雨でした。
はげしい 怖い 雨 でした。

今から思えば原爆の「黒い雨」でした。投下された現場では死体であふれ、そこは泥水が流
いま おも げんばく くろ あめ とうか げんば したたい どころみす なが
れていました。その状態の中で兵隊さんに会い「どこへ行けばいいでしょうか。」「と尋ねると、
れて いました。 その 状態 の 中 で 兵隊 さん に 会い 「どこ へ 行 け ば いい でしょうか。」「と 尋ねると、

「三篠学校に行きなさい。」といわれました。
みささか がっこう へい といわれました。

行って見ると運動場には、死体が山積みされ一方では、負傷した人々が収容されていた。中には真黒に焼けただれた人、皮膚がたれさがった状態の人々、この世とも思えない状態でした。

しばらくの間二人は、放心状態で学校の、片隅に座っていました。少しずつ状況が分かって来ると、親がどうしてるか親の所へ行かねばとの思いで、自宅へと向かいました。

あたり一面破壊され跡形もなく失くなっていました。近所のおばさんに会い、防空壕に居ると聞いてそこへ向かいました。着くと母の姿が見え、「お母さん！」と抱きつきました。お互いに大声で泣きながら「助かった」「助かった」「助かった」「生きとったんやね」と抱きあっていました。

こういう悲しい体験して見ると二度と戦争してはならない。あつては、いけない。と、強く思っています。時代の流れにより戦争体験をしましたが、私にとっては貴重なものとなりました。それがなければ、学ぶ事が出来なかつたでしょう。

今を感謝して、私しか出来ないことで社会に役立つことが、できますよう一生勉学に、はげんでいきます。

人生は短くて一回きりのものであることを思えば、やはり私たちは自分に与えられた生活を素直に生き抜かなければならないと、

思います。

ありがとうございます。

私の人生

斉藤数子

子供の頃は香川県坂出というところに住んでいました。父親が塩田の仕事を請け負っていたからでした。小学校三年生の頃でした。塩田は四季を通じて天気の良い日は仕事がいっぱいあり、家族総出で働きました。砂を混ぜたり、海水をかけたたり濃い海水を煮詰めるために大きな釜を昼夜石炭で炊いていました。海水がふつと湧き、煮詰まって塩ができるまで寄せてきて一ヶ所に集めそれをこし、水気が取れたら男の人たちがカマスに入れてはかりにかけて倉庫に積んでいました。塩は船に積んで専売所に出荷していました。雨や雲りの日には、母はむしろを編んでいました。むしろを編むには細い縄があるので私は機械でなわをなう手伝

いをしました。塩田の仕事はいろいろありましたが私はよく仕事を手伝わされました。真夏の二時、三時の一番暑いときに、額には鉢巻、頭からは日よけのタオルをかぶり、その上にもう二つ帽子をかぶり手伝いました。汗がふきでるほどで泣きたいほどしんどい時もありましたが我慢しながら濃い塩水にするために海水をこした砂を出し入れするのを手伝いました。学校を昼まで早退して仕事することもありました。今はその頃のことを懐かしく思い出されますが、その時はたいへん辛い毎日でした。早退しないで学校で勉強できたらと、それが悲しいことでした。塩田の請負で各地を転々としました。そのたびに五回も学校を変り、勉強も友だちもできず、子ども心にもたいへん辛くさびしいものでした。子供の頃はそんな生活でしたが大人になって結婚し、子供を授けましたが、離婚し大阪に出て私一人で子ども

そだ
を育てました。会社勤めも小学校卒業では余り良い所へも入れずよく変わりますが、大阪
かいせいびょういん やつきや、はい じゅうごねんと らくじゆんじり ていねんたいしよくで き うれ
回生病院の薬局へ入り十五年勤めて六十歳で定年退職出来て嬉しかったです。子供の頃も
おとな いろいろたいけん
大人になつてからも色々体験をしました。辛かった事、悲しかったこと、又嬉しかったことな
いろいろ
ど色々ありました。夜間中学で、小さい頃にじゆう分にできなかった勉強を七〇歳をこえ
はじ
て始めました。卒業の後も、「よみかき茶屋」で勉強を続けています。

じんせい やま たに えがお
人生は、山あり、谷あり、笑顔あり、といいますが、私の人生もまさにその通りでしたけれ
どそれを乗りこえてきました。

わたし じんせい たいせつ い おも
これからも私の人生を大切に生きていきたいと思えます。

おわり

